

記者の

目



山本直
大阪編集局

「一気飲み死亡事故の刑事責任」

2017年12月、近畿大テニスサークルの飲み会で酒を一気飲みした経済学部2年の登森勇斗さん(当時20歳)が急性アルコール中毒などで死亡した。両親の刑事告訴を受けて捜査していた大阪府警は今年5月、メンバーだった学生ら12人を保護責任者遺棄致死容疑で大阪地検に書類送検した。一気飲みで毎年のように死者が出る中、特筆すべきは府警が「結果は重大」として起訴を求める意見を付したことだ。被害者遺族が一気飲みの責任追及に取り組み始めて30年近く。初めての刑事訴訟追いつながる可能性がある。

「典型的な保護責任者遺棄致死だ。学生たちは急性アルコール中毒の症状をインターネットで検索し、救急車を呼んだほうがよいと分かっていたながら登森さんを引きずって別のメンバーの部屋に運び込んだ。119番通報しなかったことにより『遺棄』が成り立つと考えられる」。両親の代理人を務める井口寛司弁護士はこう指摘する。

府警によると、事故は17年12月11日夜、東大阪市にある

「自己責任」脱却の契機に

大学近くの飲食店で起きた。登森さんはビールやウオッカを一気飲みし、泥酔。体温の低下や異常ないびきなど危険な兆候があったのに救急搬送されず、翌12日に死亡した。司法解剖の結果、死因は吐しゃ物のどに詰まったことによる窒息死と分かった。

盛り上がった
空気を壊せ

学生らによるこうした事故は以前から繰り返されてきた。1990年代以降、多くの遺族を取材して感じたのは「調子に乗って酒を飲み過ぎた末の恥ずかしい事故」という「自己責任論」がまかり通り、周囲から大量飲酒を無理強いされたのではないかと思っても声を上げられない現実

だった。たくさん飲むことが宴席での正しい振る舞いであり、拒んで場の空気を壊してはいけない、という誤った考え方が背景にあるとも感じられた。85年の新語流行語大賞の金賞に「イッキイッキイッキ」という言葉が選ばれたのは、そんな飲み方が肯定的に捉えられていた証拠の一つだろう。

その流れを変えたのが遺族の一人、加来仁さんだった。91年10月、中央大1年でスキー部に所属していた長男聡さん(当時19歳)がコンパで先輩から日本酒とウイスキーを飲まされ、急性アルコール中毒で死亡。同様の事故が多発していることを耳にした加来さんは92年にイッキ飲み防止連絡協議会(事務局・東京)

を設立し、遺族間のネットワーク構築に努めた。そしてN

PO法人ASK(アスク、本部・東京)と協力して飲ませた側の責任追及を続けた。これを機に大学や飲み会の参加者個人が事実上の賠償に応じるケースが相次いだ。

だが、刑事事件の面ではハードルが高かった。加来さんらは大同工業大(現大同大)の学生が急性アルコール中毒死した96年の事故で、飲ませた学生やOBら約30人を傷害致死容疑で初めて刑事告発。

しかし、愛知県警は①被害者は成人②苦しかったら吐けるようにしてあった③暴行、脅迫はなかった——などから立件は困難と判断し、強要や過失致死容疑も成り立たないとした。

熊本大医学部灌漑部で99年、男子部員が死亡した事故では、両親が飲み会の場にいる教授や学生らを傷害致死などの容疑で告訴。民事では07年に教授や学生ら8人に約1300万円の賠償を命じる判決が確定したが、熊本地検は「故意はなかった」として早々に不起訴を決めていた。加来さんが05年に亡くなった以降、刑事責任を追及する動きはほとんど表面化しておらず、同協議会やアスクも飲ませた側の起訴に至った例を把握していない。

登森さんの両親も事故から間もない時期、府警布施室に相談し、いったんは門前払いされたという。それでも関係者の聞き取りを粘り強く続けた。井口弁護士の発言にある「ネット検索」や飲食店から

移動した状況の一部は、主に父親が突き止めたものだ。学生たちは登森さんの年齢を知らなかったといい、府警の調べに「未成年の飲酒が発覚したらサークルが潰れ、自分たちが処分されるかもしれない」「先輩の就職活動に関わる」と供述。飲み会に参加した当時の3年生4人と介抱役として後で駆け付けた2年生8人の計12人(告訴対象は6人)が書類送検された。

身勝手な都合で
放置は許されぬ

介抱役を決め、酔いつぶれた者を覆かせるスペースを用意し、有形無形の圧力で大量の酒を飲ませる構図は多くの事故に共通する。アスクの今成知美代表は「これまで被害者が勝手に死んだことになってきた」と憤ると同時に「以前は寛容だった飲酒運転も啓発が進み、厳罰化された。今回警察が積極的に動いたのは、事故が同じパターンで繰り返されてきたという時代背景への考慮もあったと思う」と変化に期待する。

もちろん刑事責任の追及は厳格になされなければならぬ。ただ、身勝手な都合で仲間を死なせたようなケースでは、刑事責任の面でも厳しい処分を求められることがあると示した意義は大きい。頻発する一気飲みの事故で、自己責任論からの脱却が進む契機となるのか。検察の判断に注目したい。



登森さんが死亡した事故を巡り、記者会見で謝罪する近畿大幹部—大阪市西区で2月7日、猪飼健史撮影